

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第四十八回）

けんしらぎし

遣新羅使と万葉集（その3）

↳ 船立つに臨みし時のぞ↳

○天平八（七三六）年六月、新羅（朝鮮半島南東部にあった国）に遣わされた使人たちは瀬戸内海を經由し筑紫（九州）を経て朝鮮半島へ向うため、大和朝廷の外港であった難波津に集合してから出港した。

・万葉集にはこの時に派遣された遣新羅使人等が詠んだ歌が百四十五首載る。

・この歌群の冒頭に位置するあたりに使人たちが難波津から出港するにあたり、これからの瀬戸内海を西下し筑紫（九州）を経て、はるかに遠い朝鮮半島にある新羅への海路への不安さから作られただろうと思われる「發つたに臨むのぞ時までに歌なり。」との題詞のある次の3首がある。

おとおも

みつ

ふなの

こ

で

1) 大伴の 御津に船乗り 漕ぎ出ては

いほり

いづれの島に 盧 せむわれ

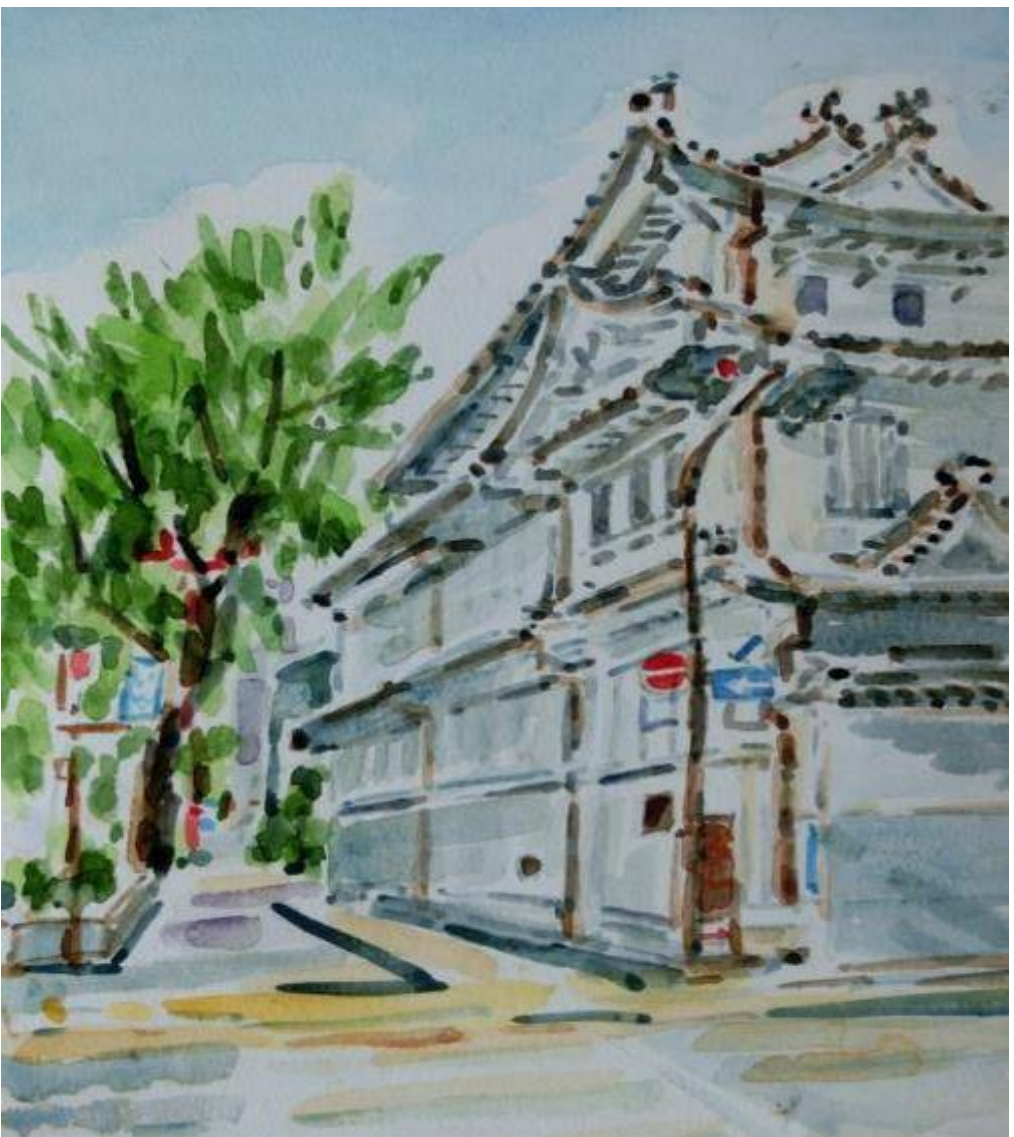
卷十五—3593

使人

（解説）大伴の御津で船に乗り、一旦漕ぎ出したなら、その先はこの島に仮のやどりをするようになるだろう、私は。（たよらない気持ちだ。）

・犬養孝著『万葉の旅』には【大伴の御津】の「大伴」は大阪市を中心に一带広範囲にわたる地の総名。もと古代の豪族・大伴氏の領地であったと見られる。また、「御

津」の「御」は美称。「津」は湊。万葉集中では地名化していて、難波の湊、すなわち「難波のみ津」、「大伴のみ津」をいう。その所在はこんにちも明らかにしがたいが、上町台地（*「上町台地」とは大阪市街の東側、大阪城から四天王寺あたりを経て、住吉大社にいたるまでの標高20メートルから10メートルの高台をいう。）の西方にあった海浜地で、大阪市中央区心斎橋筋の町名に三津寺町みつがあり、三津寺みつの寺名があるのは、その名残かと見られる。とある。



（写生地）三津寺は大阪市の中心部を南北に縦断する道路で大阪市の北の玄関口「梅田」と南の玄関口「難波」を結ぶ「御堂筋」の中心地である心斎橋と難波の中間地点に天平十六（745）年創建したとされる古寺である。

・昭和八（1933）年御堂筋の拡張工事の際に建てられた御堂筋に面した本寺の建屋を描く。（杏花）
なお、この地は古代の海浜地であったと考えられている。

・さらに、犬養孝著『万葉の旅』には大伴の津は難波にあった津で、上町台丘陵地に沿っていた海にあった難波津の主となる津であり、その位置比定については三津寺説（千田稔氏）以外の説に高麗橋説（日下雅義氏）などがある。

・「高麗橋」は、大阪城の外堀として開削された東横堀川に大阪城から西へ約1・2キロメートル離れた位置に架かる橋で、慶長九（1604）年には擬宝珠（擬宝珠）をつける重厚な橋となり、江戸時代には交通の要所などに架けられ幕府が直接管理する公儀橋となり重要視されていた。この橋の位置一帯が古代の難波津に比定されている。

・高麗橋という橋の名の由来には諸説があるが、古代・朝鮮半島からの使節を迎えるために作られた迎賓館の名前に由来するなどの説がある。（大阪市）



（写生地） 大阪市中中央区を流れる東横堀川に昭和4年に架けられた現在の「高麗橋」

を描く。（杏花）

・高麗橋は明治時代には里程元標がおかれ、西日本の主要道路の距離計算はここを起
点として決められた。(大阪市)

2) 妹とありし 時はあれども 別れては

ころもで

衣手寒き ものにそありける

卷十五—3591 使人

(解説)

妻と一緒にいた時はまあよかったけれど、別れてみると、衣の袖が冷え冷えとして
寒いものである。

うなはら

うきね

3) 海原に 浮寝せむ夜は 沖つ風 いた

くな吹きそ 妹もあらなくに

卷十五—3592 使人

(解説)

広い海の上でとまる夜は、沖の風よ、ひどく吹かないでくれ。いとしい妻もいない
のだから。(註)「浮寝」とは船で水に浮いたまま寝ること。

・遣新羅使一行は万葉歌に詠われているように、これから向う海路に不安一杯に 難
波津を出航しただろうと思われる。

(参考文献)・日本古典大系・大阪市・大川貴代著「万葉を歩くく大阪の恋歌」

・犬養孝著「万葉の旅・中(近畿・東海・東国)など